

## 「チ・カ・ホ」から「アカプラ」へとひろがる札幌の「まちなか広場」

**都心の回遊性を高める道路空間のコンバージョン**

札幌駅と大通を結ぶ「札幌駅前通地下歩行空間（愛称「チ・カ・ホ」）」がオープンしたのは2011年の3月12日。東北大地震の翌日でしたが、一日で11万人の方が利用され、人の流れも大きく変わりました。このチ・カ・ホ誕生の背景には、その8年前に札幌駅南口再開発で大規模商業施設がつけられ、都心の商業中心がそれまでの大通公園以南から札幌駅周辺にシフトしたことがあげられます。再び均衡を取り戻すのには、都心の回遊性を高める必要があったのです。

2001年に行われた札幌駅と大通を結ぶ地下通路のあり方を話し合う市民ワークショップでは、単なる通路ではだめで、市民活動のできる空間とするなど通常の道路ではできない利用を可能にし、沿道のビルと地下通路の接続を促進し、にぎわいのある空間にするほか、ユニバーサルデザインの空間、そして、地上の光を取り入れるなど明るい空間にする必要があると指摘されました。地下通路を通行のための施設だけでなく都心のにぎわいを生む新しい機能をもたせたカタチにコンバージョンすることが求められたのです。

**地下通路に賑わいをつくる3つの仕組み**

巨額な費用が必要とされるチ・カ・ホの整備には、市民の間に反対意見も多く、2003年に市民700人以上が参加した都心の今後の交通のあり方を考える大規模ワークショップでも賛否は分かれました。反対理由の多くは地下より地上の快適性を高めるのが先決というものでしたが、その他、本当に道路で市民活動が可能になるのか、沿道ビルが地下に接続する投資を行うのか、その担保が無い。結果的に誰も使わない単なる通路になるのではないかという懸念も強くありました。

そのため、チ・カ・ホに賑わいをつくるためには3つの仕組みが必要とされました。一つは、道路を広場として利用できるようにするための「広場条例」の制定です。道路で禁止されている行為のうち、賑わいに寄与するものを認める根拠が制度化されました。二つ目は、沿道ビルの地下接続を促す仕組みづくりです。これについては沿道の地権者が地区計画の提案制度を活用し、ビルの地下接続や、地上と地下をつなぐ施設の整備、地上の広場整備などに対して容積率の上乗せがされるようになりました。そして三つ目は、チ・カ・ホの広場でさまざまな市民活動などが行われるように、適切なマネジメントをする機構をつくるということでした。

**まち会社による「チ・カ・ホ」のマネジメント**

チ・カ・ホの広場活用のマネジメントを担ったのは、札幌駅前通まちづくり株式会社（以下、まち会社）でした。札幌駅前通の賑わいを創出し、回遊性を高めるなど都心の魅力向上につながる様々な事業を行うことを目的とした会社で、札幌駅前通沿道の地権者が主体となって設立されました。まち会社はチ・カ・ホの指定管理者として札幌駅前通に相応しい広場の活用を促す取組みを行っています。さらに、広場の貸し出しやエリアマネジメント広告の掲出などの事業を通じて得られた利益により、広場を活用したアートイベントをはじめとした様々な自主企画事業を行い、さらに、地下にも潤いをもたらす緑化などの事業にも取り組んでいます。

チ・カ・ホのオープンから4年近くになりますが、広場の活用は年間を通して8割を超えるなど、札幌駅前通の新しい顔となっています。それだけに、活用のコンテンツやデザインに関して出来る限り質を高めることが求められています。まち会社では自主企画事業を通じて良質な先例をつくることに努め、広告のデザイン審査にも力を入れています。

**「アカプラ」の誕生でひろがる「まちなか広場」**

2014年には、北海道庁の赤レンガ庁舎前の北3条通を歩行者専用の広場とした「札幌市北3条広場（愛称：アカプラ）」が誕生しました。隣接して建てられた商業業務ビルのオープンスペースにはカフェテラスが設けられ、広場と一体に、歴史を感じさせる赤レンガ庁舎を借景に落ち着いた雰囲気空間となっています。

まち会社はアカプラの指定管理者にもなり、チ・カ・



ホとはひと味違う多くの市民や企業が参加する活用に力を入れ、新しい都心コミュニティの形成にも取り組んでいます。

チ・カ・ホと、地上の大通公園やアカプラをつなぐアトリウム広場も3つになるなど、人々の回遊を誘う「まちなか広場」の立体的なネットワークがひろがり、今後、札幌に新しい都心のアクティビティが生まれることが期待されます。

（札幌駅前通まちづくり株式会社企画事業部長 石塚雅明）